

2013 10/8

No.1956

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



第68回国民体育大会「スポーツ祭東京2013」は9月28日、2020年夏季五輪、パラリンピック開催決定を祝福するムードの中、東京都調布市の味の素スタジアムで約3万3千人の観衆を集めて総合開会式が行われた。



contents

視点・点描	3
読書の秋、辞書もひこう	
政治	4
経済対策で腰折れ懸念払拭を 消費増税、97年を教訓に	
国際	6
イスラム過激派が主導権握る シリア、悪夢のシナリオ現実に	
企業最前線	8
段ボール業界 海外展開加速 国内は設備更新で競争力強化	
くらし2013	10
足は全身の血管病を見る窓	
広告珍談	12
～うまい物がたり②④ 正宗をご存じか！	
NNAアジア経済レポート	13
会員のページ	14
会員の動き	
会員のページ	15
新入会員です 設立50周年は3年後に	

視点 点描



読書の秋、辞書もひらいて

中学生のころ、「『イチリョージ ツチュー』の意味は」と教師に問われ「いつやるのか不明なこと」と答えて、笑われた。政治家の答弁でしか聞いたことがなかったので、そう思い込んでいたのだ。「一両日中」は「一日か二日のうちに」ということを、辞書をひいて納得した。言葉は難しい。

国民健康保険運営協議会に出席した時、「特定健診」という言葉

にひっかかった。何を「特定」するのかと思ったら、「メタボリックシンドロームの該当者と予備群の人を早期に発見し生活習慣病を予防するため」の健診だという。俗に「メタボ健診」と呼ばれる、腹回りを巻き尺で測る、あれだ。さらに「特定健康診断」の略だと思いきや、正しくは「特定健康診査」。健康診断も健康診査も意味的に大差ないそうだが、なんと

なく落ち着かない。「特定」とあるのは、母子保健法などで普通に「健康診査」という言葉が使われているので、それと区別するためらしい。

とにかく分かりにくいぞーと心の中でつぶやいていたら、事務局から、名称が分かりにくいという声があるので対策を考えたい旨の説明があった。やっぱり。

厚生労働省のホームページを見ると、メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）という表記になっている。「シンドローム」は「肥満」とか「太め」という意味ではないのか？ でもちよつと太っているだけで病気扱いされるのは心外だ。英和辞典をあたると「メタボリック」は「代謝性の」とある。新陳代謝の代謝だ。直訳すると「代謝異常症候群」。なる

ほど。注目すべきは体形ではなくて、血糖値や脂質などの「代謝」の状況なのだ！ 人目をひくフリーズは、分かりやすいが、落とし穴も多い。

以前、「成人病」と呼ばれていた疾病は「生活習慣病」に改められ、「痴呆症」は「認知症」になった。旧日本軍が「退却」を「転進」に、「全滅」を「玉砕」に言い換えたのは有名な話だ。8月がくるたびに「終戦」なのか「敗戦」なのかと、かまびすしい。マスコミは8月15日を「終戦記念日」と呼ぶが、政府広報ではあくまでも「戦没者を追悼し平和を祈念する日」だった。

言葉に込められたものは意外と重く、深い。読書の秋、辞書もひいてみよう。

（神奈川新聞社文化部長

青木 幸恵）

正宗を「存じか！」

日本酒になると、またぞろ、知ったかぶりがわんさと現れる。やれ伏見だ灘だ、いやいや吟醸だ山廃だ。うるさい、だまってる飲んでろといいたくなる。

そんなヤツらが知らないことがある。「正宗」、日本酒の俗称だとか（広辞苑に書いてある）。灘の山邑太左衛門が名付けた銘柄が、いつしか日本酒全体をいい表すようになってたらしい。よほど、うまいにちがいない。

正宗はまだある。相模でつくられた日本刀、すなわち相州物。鎌倉後期の無比の刀工、岡崎五郎正宗が鎌倉に住んで古刀を研究、見事な地景（刃文）を完成した。太刀の「不動正宗」「大黒正宗」「京極正宗」など、短刀の「包丁正宗」が広く知られる。

はて、この

広告は、日本最初の色刷りである。といても黒と赤の2色。黒は記事の活字とともに広告のほとんど。赤は「正宗」の文字のうしろにある。サクラの花ピラと、左横の「名声布四海」の5文字だけ。

しかし記念すべき広告で1886（明治19）年、報知新聞に掲載された。あらゆる新聞は発刊以来、黒1色で刷られてきた。そこへ色



刷りとは大革新。目だ立たせるため、注目度を上げるためである。印刷現場はたいへんだった。刷り上ったのは発行日の朝7時半、そこから各地へ各戸へ配られたのだから。左端に見える「鹿嶋清兵衛」はユニークな人であった。

い。デジカメでパチパチするのは大ちがい。フィルム以前の時代で、乾板という感光材。想像を絶する高価なもの、だけど金はくさ

るほどある。ヨーロッパから取り寄せたバカでかい、カメラや三脚や乾板を人足に担がせての撮影行。富士山を撮ってヨコ166センチもの大作を、明治天皇に献上した。歌舞伎座で天井からアーク灯をぶらさげて、マグネシウムを火花させての大撮影は、9代目市川団十郎演じる歌舞伎十八番の「暫」。歌舞伎初めての写真とか。

とうとう写真大尽と呼ばれた。大尽とは遊里で豪遊する人、なしるお座敷遊びも大好き。ある日、東海道線の列車を借り切って、新橋のきれいだころを引き連れて車内でドンチャンさわぎ。京都に着くと加茂の川原で大撮影会。ついにお家から破門？ 除籍されたとか。それにしても「正宗」の一手売捌所とあるが、ちゃんと販売したのかな。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）
 「正宗」の色刷り広告・1886（明治19）年掲載